
“旅人”

疾風迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“旅人”

【Nコード】

N8103I

【作者名】

疾風迅雷

【あらすじ】

あらすじは：なしです（笑）

只今、受験生なので日々書き綴る内容がばらばらになり、それをまとめておくるので、自分でも表現しづらいです。第一章は旅人の“私”の世界に繰り広げられる“闇”がついに我々の住む地にまで押し寄せてきた！という内容です。精一杯書いたので、ぜひ読んでください^^

第一章 崩れた均衡（前書き）

今回、小説投稿サイトに執筆してみることになりました、疾風です^^
自分はまだ受験生と、人生の経験や文学的な経験・知恵・語学力も
浅く、

熟練の方から見れば、稚拙な内容かもしれませんが＜＜
しかし、僕は自分の作品に自信を持っています。

自分の作品に精一杯力を注ぎ、また、読者の皆様からも愛読される
ような小説になるように

いろいろと工夫して書き記してみました。

どうぞ、読んでみてください。

第一章 崩れた均衡

とある農村で・・・

“私”は出発の支度をした。

元々、ここに長居をするつもりは無かったが、村長直々の願いであれば

無碍にすることもできない。

ここ2、3週間は住民達の手厚いもてなしで、私は一つとして不快な思いはしなかった。

「あのう・・・」

扉に目をやると、一人の若い女性が両腕に袋を掲げている。年齢は20くらいだろうか、顔立ちも良く、きつといい嫁になるのだろう。

「何かようでも・・・」

私は作業を中断し、女性の方へと歩み寄った。

「私どもの村で獲れた木の実や種などをお持ちしました」

そう言って、彼女は私に先程まで大事そうに抱えていた袋を渡した。

「済まない」

私は溜息混じりに言った。

「少し待っていてくれ」

本来、旅の途中で援助を受けることは禁じられているのだが食物の残量が乏しかった私には正に救いであった。

私は道中で手に入れた“リリアンの耳飾り”を彼女に渡した。

「まあきれいな！」「いただいてもよろしいのですか？」

「そんなものでも良ければ、使って下さい」

「ありがとうございます」

彼女は一礼して部屋を去った。

『さて、作業に戻らなければ…』

私はペンをとり“調査書”の仕上げにかかった。長老からの指示である。

我々は一人前として“旅”が可能であると長老に判断された時、はじめて一人前とみなされる。

志半ばで道中倒れる者も多々あり、そのまま行方を眩ます（くらます）ケースもある。

私に与えられた任は“世界を見る”である。

それが私にどういった意味を持っているのかは分からない。

ただ、私は気の赴くままに各地を旅して過ごしている。

その都度、私は村や都市の近況、彼らの生き方、人口や産業の推移などを

こと細かく記載し続けている。

・・・この村は7番目にあたる。

どのくらいここに綴る事になるのかはまだ検討もつかない。

・・・最後の一行を書き上げた。

私は荷造りを済ませ、武装にとりかかった。

ほとんどの装備は長老より授けられた物である。

剣を腰に帯び、胸当ての身にまとい、手甲を取り付けた。

幸い、私はまだ道中襲撃にあったことはない。

本来、こういった装備で旅を続けると精神面でも体力面でも辛い…

しかし、外敵から身を守るは我々の務めだ。

私は馬小屋に向かった。私の相棒に会うためだ。

“フォーマルハウト”

長老より与えられし馬だ。名前は国からとってある。

“フォーマルハウト”は普通の馬とは異なり、意思の疎通が出来るのだ。

彼の育った国こそが“フォーマルハウト”

その地では人は幼い頃より馬と親しみ、人と自然と水が彼のような

馬を育て上げるのだと聞いた。

「行こう」

私は手綱を引いて外へと歩み出た。

村民達の送迎を受け、村の門にさしかかった。

たくましい二人の青年が槍と矛を持ち、堅く門を守衛している。

私は二人に軽く頭を下げ、村長に礼を述べ敷居を通り抜けた。

次に行く予定の村を確認し、徐々に小さくなっていく村を眺めた。

「・・・ザッザッ・・・ザッ・・・」

遠くで音が聞こえる。

“少し止まってくれ”

私は馬から降り、地に耳をつけた。

「ザッザッザッザッ」

間違いない、行進の音だ。

しかし、今頃どこの国がこの様な辺境の地に軍隊を……あっ！

私の頭の中で一筋の光が煌いた（きらめいた）

ヴォルークだ。

元より、ここらの辺境の国々は四大国家の何れかに属している為、

軍を持っていない。

いわば、自衛能力に著しく欠けるという事だ。

モンスターどもが隊を構成し、行軍するとは考えられない。

となると、最も信じたくない結論に達する。

「ザッザッザッ・・・」

音はますます大きくなっていく。

私は急ぎ、その場所から離れると付近の丘の上に駆け上がった。

私の立っている位置とり北西に先程の村、そして北の方向に・・・ヴォ

ルークだ。

ヤツらは間違はなく村を狙っている。防衛線は何をしていたんだ？

“永年戦争”

人とヴォルークの間で続いている戦い、もう数百年も前からだ。

ヴォルークは人に似たものや、巨人・異形の戦死や魔獣の姿をし無差別に我々を襲ってくる。

国はそれを防ぐ為、国から遙か遠くの人里離れた土地に砦を築き、半年交代で兵を入れ替えている。

その戦士達のおかげで我々の平和は維持されているが、防衛線が破られれば我々は終わりだ。

そう、私の目の前で起きている事こそが正しくそれだ。

村に兵はいない、助けなければ・

しかし、もはや手遅れである。

ヴォルークはすぐそこにまで迫っており、私の所から全速力で向かったとしても

既に村には襲撃された後しか残っていない。

無力：何の力もない：

目の前で一つの人々の集まりが滅びようとしているのに、私にはそれを止める術がない。

今まで学んだ事はなんだったのか？

人々を救う力が自分には無いのか？

所詮、武術の訓練などはその程度である。

単体として、大きなものに挑む術は教わることはない。

いかに対人戦が優れていようと、数の差に勝つことはできない。

もう駄目だ。

先鋒のヴォルークが村に達した。

先程の二人の青年が如何に奮闘したとしても数十倍の彼らには太刀打ちできない。

ヴォルークは門を突き破り、辺りの民家を当たるが幸いと薙ぎ倒している。

『！！』

人々の悲鳴が私の心に響いてきた。何と重く悲しい思いだろう：ものの数分で村は消滅した。

私は悲しみの余り、落馬しそうになった。

その体を抱えるように“フォーマルハウト”は体を起こしてくれた。

“行こう”

“しかし、何処へ？”

“こうなるのはここだけじゃない”

“そうだな・よし，“ローラン”へ行こう”

私は手綱をとり、急ぎローランへと向かった。

第一章 崩れた均衡（後書き）

第一章は少し堅苦しい話かもしれませんが。

第二章・第三章ともっと面白くしていくつもりですので、引き続き愛読ください^^

第二章 予兆（前書き）

第一章にて、ローランへ向かった“私”
ローランの門を抜け、王への面会を許されます。
後は、読んでからのお楽しみ^^

第二章 予兆

ローラン

四大国家の一つ、近年は豊作続きで国の財源は潤っている。

古くより“武術”に力を入れ、今日に至るまで様々な技を生み出している。

中でも槍をとったら大陸一の強さを誇っている。

属領は全部で32つ、内7つを私が訪れた。

中心都市ローランは他に類を見ない高い城壁で守られており、

先の大戦において、その防衛力に勝ったものはいない。

数年ほど前に王が亡くなり、今は二人の息子、ラード・レオンによって

統治されている、まだ若い国家だ。

国民は老人・女・子どもを除く、全ての男子はいつでも武器を持てる自衛国家だ。

永年戦争での戦果も他国に劣らないものがある。

ヴォルークの行軍速度はフォーマルハウトより格段と遅い。

私達が急がなければローランの属領は全て滅ぶ。

野を越え、山を越え、谷を過ぎ、途中に休憩も挟まず、一心にローランを目指した。

道程、モンスターに遭遇する事も多々あったが、向こうから攻撃してくる事は無かった。

“白門”

ローランの城壁の呼び名だ。そびえ立つ白き壁を前に私は叫んだ。

「ローランの守衛よ、門を開き給え！」

「カラッ」

壁の一部が外れ、そこから人の顔が現れた。

「旅の御方と見受けるが、我が地に何用で？」

「まずは門を開けて欲しい、急ぎの用で駆けつけてきたのだ」

守衛は私と相棒を見て事情を察すると、更にもう一つの箇所、壁の外れ

私とフォーマルハウトが通れる大きさの入り口が開いた。

「入られよ」

城内は活気で満ちていた。通りは人で賑わい、広場では子どもが跳ね回っている。

一瞬、私はその中に溶け込みたいと欲した。

“私には伝えなければならぬ責任がある”

「至急、国王に取り次いでいただきたい」

守衛に身分証明書を出して依頼した。守衛は証明書に目を通すと、驚いた表情でこちらを凝視した。

「分かりました。宮殿まで案内しましょう」

白門の中は華やかさが溢れている。

傍の道には行商人が佇み（たたずみ）、異国の品を売っている。

しばらく歩くと、更に門があった。ここも白壁だ。

守衛は壁に向かって何か囁くと門はゆっくりと開いた。

『ここが王宮か』

じっくり眺める間もなく、応接間へと導かれた。

既に連絡は届いていたらしく、ジャッジが待っていた。

（ジャッジとは国の各分野、司法・行政などの最高責任者。いわば総督である）

私は一礼し、事の概要を述べた。

「では、国の防衛線が破られたと？」

「そこまでは分かりかねますが、おそらく、そうではないかと」

「あの砦が陥落するとは・・・」

「閣下、事態は緊迫しております。今すぐ兵を向けねば属領の諸国

は皆

ヴォルークによって滅ぼされるでしょう」

「分かった。至急、陛下に進言致そう」

その時、応接間の扉が乱暴に開かれた。

「総督!!」

本来ならば許されない行為だが、事情が事情である。

「何事か？」

「砦が陥落したと急使が・・・」

兵はそう言うのと後ろで二人の兵に肩を担がれた兵が入ってきた。

「彼は砦の唯一の生存者です」

男は砦の見張りの役職に就いていたと言った。

私があのか村を訪れるよりも遥かに前、一個団体のヴォルークの軍が砦に押し寄せてきたそうだ。

砦は懸命に防衛し、二、三日はなんとか防げたがヴォルークは日を追うごとに数を増し

今や数十万の兵力で砦を攻めてき、最初の隊が攻め込んできた4日後に砦は陥落した。

・・・そう男は告げ、医務室に運ばれていった。

「総督!!」

間を置かずに次の兵が入ってきた。

「何事か？」

「ヴォルークが：国の防衛線を破り到着まで2、3日という距離に来ております」

「何と!!」

ジャッジと私は応接間を出て王宮の見張り台へと登った。

「北の山と林の間に奴等はいます」

見れば、なにやら黒き影がうごめいている。

「閣下、向こうからも・・・!!」

西の方向、東の方向にも黒き影・・・

ローランの城は北に山、西・東に平野、城は背後の絶壁によって守

られている。

南を除く、三方位からの侵略ではとても持ちこたえられない。

「急ぎ、他国に使者を飛ばすのだ」

「はっ」

「どういたした、総督」

後ろから気丈な声で凜々しい（りりしい）青年が近づいてきた。

風貌からして、ローラン王…ラードだろう。

「これは殿、ゆゆしき事態となりました。三方位よりヴォルークが迫っております」

「ほう、ヴォルークとやらは何処にいるのだ？」

「あそこを見て下され」

「…ふむ。2，3日後にはここに来るな」

「如何なさいますか？」

「ああ、戦の用意とでも伝えておいてくれ」

「…殿、その様に悠長にしておいては闇に飲み込まれますぞ」

ジャッジは唸る様にして言った。

青年は振り向くと

「ローランの民は強く賢い、恐れるばかりでは民に恐怖心を与えるだけさ」

「さて、今日は武具の手入れでもしようか？」

笑いながら青年は宮殿へと去っていった。

「陽気な方ですなあ」

「裏目に出なければいいのですが・・・」

ジャッジは依然と平野に現れた闇を見ながら言った。

私は城壁に体を預けた。

「2，3日後には、ここは廃墟となるかもしれません」

ジャッジは俯き（うつむき）ながら言った。

「白門の防衛力は群を抜きます。数十台の投石車にはびくともしないでしょう」

私は白門を指し、落ち着いて言った。

「報告では、ヴォルークの数は5, 60万だそうだ」

「それならば問題ないでしょう」

「数日経てば、報告も変わろう」

私は閉口した。

「ローランの兵力は20万の騎兵・20万の射手」

「そして70万の槍兵によって成り立っている」

「計110万ですな」

「国の若い者に武器を取らせれば更に増えよう」

「しかし、数百万の兵力でもっても奴等には勝てぬ」

「なぜ、そう断言できるのですか？」

ジャッジは振り向き、視線を私にと移した。

「あなたは奴等の強さを知っておられぬ」

「人間と等身大の兵が連中の軍の4割、人の丈の2倍を越える兵が5割」

「残りの1割は化け物だ」

ジャッジは声を荒げて言った。

「化け物…どういったものでしょうか？」

「見ていただければ分かる」

「ヤツに人間は勝てない」

その時の私にはジャッジに言った化け物がどういうものであるか見当がつかなかった。

しかし、一国のジャッジである者が恐れるものであるならば油断は出来ないと感じた。

「本来ならば、あなたをお迎えした事を誇りに思うのですが・・・」

「この国の未来は一寸先も見えませんが、他国に身を移すもヴォルークがいる」

「つまり、我々に逃げ道は無い」

「では、戦いましょう」

私はジャッジの手を取り、地平線を指した。

「未だヴォルークの刃を折った者はいません」

「しかし、その刃に倒れた歴史も無いのです」

「ローランが侵攻されたとなれば他国も黙ってはいないはず・・・」
「すぐに応援が来るでしょう」

私は手を降ろし、剣の柄に手を当てた。

「私も戦います、私が守れなかった人々の為にも・・・！」
ジャッジはしばらく沈黙すると、その重い唇を動かした。

「やれる事はやりましょう」

「王宮に留まってくだされ、来客用の特別の部屋があります」

「ありがとうございます」

「では、また」

ジャッジは見張り台から降りていった。

しばらく私は見張り台に留まり、塔からの景色を鑑賞していた。

第二章 予兆（後書き）

第三章へと続く

第三章 出陣の“宴”（前書き）

第二章にて王に危機を告げた“私”
宴会に誘われます。

前書きを書くのが、苦手＋下手です・・・
読んでからのお楽しみへへ

第三章 出陣の“宴”

来客者用の部屋：…にしては随分と華やかな部屋である。

部屋の要所要所に置いてある陶芸品や武具、絨毯にしても一流ものである。

私は部屋に荷を降ろし、命を受け配置されていた従者にフォーマルハウトの世話を頼んだ。

背もたれのあるレザー製のソファーにゆっくりと腰をおろした。

従者は暖かく湿ったタオルを用意してくれた。

「ありがとう」

私は顔を拭き、手を拭き、従者に渡した。

「宴会が開かれますので、準備の方を」

「宴会？」

「はい。陛下及びジャッジの皆様が出席なされます」

「分かりました。私でよければ一緒にしましょう」

王宮の通路は広く長かった。

道は赤い絨毯で統一されており、壁には武具や絵画が展示されている。

「ここが宴会場となります。ごゆっくりとどうぞ」

「ありがとう」

扉を開くと、既に王やジャッジは待っていた。

「ようこそ、我が宴会場へ」

よく通る声だ。おそらく、ラードの方だろう。

ジャッジは総勢9人、王は2人

計12人でだ円状のテーブルに座り、食事を頂いた。

「ローランで獲れた作物でなく、これがまた旨いんだよ」

ラードはご機嫌上々である。

「左様、国民の勤労の結晶であります」

女性のジャッジだ、珍しいな。

近年の豊作続きは彼女の功労ということか。

私はラード王の隣に座っているレオン王に視線を移した。

放浪中、私が耳にした噂では、ラード王は陽気な君主で民に優しく、学に秀でている。

レオン王は冷静沈黙とした君主で、兵の統率能力に優れ、前線で戦う主君だそうだ。

ラードはレオンに耳打ちすると、レオンは隣にいたジャッジに耳打ちした。

ラードは食べるのを止め、箸を置くとサッと立った。

「諸君、実は重大な知らせがある」

ジャッジも食べるのを止め、姿勢を王に傾けた。

「国を脅かす“黒き影”が我が国を目指して進行している、少なくとも

3日後にはここにつくだろう」

「だが恐れることは無い。既に他国に使者は飛ばした」

「他国が急ぎ駆けつけてくれれば7日後から11日後には応援に来るだろう」

「しかし、ヴォルークはそれよりも早く、間違いなく来る」

「ヴォルーク如きに負けてはローランの名が廃ろう」

「4日でも8日でも防衛し、他国にローランの意地を見せつけようではないか!」

「おお!!」

この覇気があれば、まず、問題ないだろう。

「レオン、お前も一言頼むぜ」

言われて、レオンは立ち上がると

「私は前線にて奴等と正面で以って（もって）戦う」

「ローランの武人の誇りを兵士に見せ、士気を高めるつもりだ」

「おお」「流石は陛下」

「私は英雄訓練所に力を注ぎ、素晴らしい“ジャレル（英雄）”を手に入れた」

レオンは従者に耳打ちすると、奥の扉が開かれ8人の青年が出てきた。

皆、たくましい体つきで、どれをとっても一角の剣士だ。

「お招き頂き、光栄に存じます！」

8人は声を揃えていった。

「私が武術をつけた。訓練所での経験を糧に中軍にて戦わさせる」「キャッツ！」

「はっ」

8人の内の一人が歩み出た。8人の中では小柄な方だが180は軽くあるだろう。

「彼は私と共に前線で戦うことになった。無論、一万の兵を率いる將軍である」

「光栄に存じます」

“軍事”のジャッジは立ち上がると、キャッツに激励の言葉をかけた。

8人は一礼すると部屋を去っていった。

「彼ら“ジャレル”と私で、ヴォルークを必ず食い止めましょう」

「兄上、今までお世話になりました。私はこれより戦の準備があるので、これにて席を外します。

長らく、ありがとうございました」

「弟よ、君の武運を心より祈る、ローランに幸あれ」

「ローランに栄光あれ！」

レオンは皆に一礼し、部屋を去っていった。

「頼りある御人だ」

私は一言述べた。

「何もなければ良いのだが…」

“軍事”ジャッジは溜息をついた。

「では、これにて今日の宴会は終了だ。弟の出陣を祝ってくれ」

「はっ」

「旅のお方」

「はい？」

「少し話がしたい。別の部屋にて話そう」

「分かりました、付き合いましたう」

私は席を立ち、ラードの後に続いた。

第四章 誓い（前書き）

第三章にてラード王より誘われた“私”
腹を割って王と語り合い、自分の目的を明かします。

第四章 誓い

部屋はラーズの王室であった。

壁には歴代のローラン王の肖像画、“白き盾”と“赤き槍”が飾られている。

「父上のだ」

ラーズは一番左に展示されている1つの肖像画を指していった。

「父は昨年、永年戦争にて戦死した」

「そうだったのですか・・・」

「化け物」

「ジャッジが言っている“化け物”とやらと戦い、華々しい最後を遂げたんだとか」

「ジャッジは父と共に前線で戦っていたから、よく分かるらしい」

「化け物ですか・・・」

「兵は恐れおののき、次々と退却していく中、父は突撃した」

「無念にも父は刃に倒れ、亡くなった」

私は沈黙し、前王の肖像画に目をやった。

「父は誇り高きローランの戦死だ」

「私は戦えないが、民を愛することならできる」

「武具は、とっくにレオンに譲ったよ」

「・・・私に話しとは？」

「ああ、済まない。少し無用な話だったかな」

「いえいえ、前王について知ることができました」

ラーズは椅子に座り、私も腰掛けた。

「噂はかねがね、君が例の“旅人”という者か？」

「・・・」

「無理にとは言わんさ、しかし君の部族の事も知りたくてね。我が国の国庫図書館で

一夜明かしたこともある」

「本によれば、旅人は1人1人異なる使命を持っているとか」

「君がローランへ来た。同時にヴォルークも来た、疑っているわけではないが、

属領は全て滅んだ」

ラードは異国の特産物でも見たかのように目をキラキラ輝かせている。

「私の使命は“世界を見ること”、それが私にどういう意味を持っているのかはまだ分からない」

「しかし、私がローランに訪れ、ローランの存亡を賭けた戦に関わるのもまた“旅”です」

「我々は“旅”の中で生き“旅”と共に過ごしている」

「では聞くが、ローランには幾度もそなた達が訪れた」

「その度に君達は何らかの禍根を残していた」

「私がまだ子どもの頃に訪れた“旅人”は国に伝染病を持ってきた」

「領民は5、6年、その病にさいなまれ、苦しんだ」

「次に来た“旅人”はヴォルークを呼んできた」

「君らは、我々を滅ぼそうとしているのかな？」

ラードの真剣な眼差しには、国王として、領民の事を広く考えた結果、

その視野の先には私が映っている。

「それは心外です」

「では…」

「“旅人”は危難を伝えるものと私は考えています」

ラードの迫及を遮り、私は断言した。

“旅人”にどのような意味があるのかは私にも分からなかった。

しかし“旅人”に嫌疑が掛けられている以上、何とか理解してもらわなければならない。

「“旅人”は我々に危機を伝えてくれるといたいのか？」

穏やかな表情と落ち着いた言葉。真の君主となる日も近いだろう。

「我々“旅人”が運んでくるものが災いというのは陛下の偏見でしょう」

「我々は“旅”の中に“生”を見出します」

「学んだものは人に通じ、鍛えたものは戦場にて功労となるでしょう」

私は静かに、そして強く言った。

「はっは」

「“旅人”は“旅”に“生”を見出す・・・か」

ラードは笑っていった。

「それもまた生き方だ。君達が“旅”に“生”を見出すなら私は“国”に“愛”を見出そう」

ラードは右手で従者に合図し、ペンと紙を持ってこさせた。

「では誓いを立てよう」

「いいでしょう」

「期限は無しだ。君と私は年が近い。私が王道を築き上げたとき君は真の伝道者となる」

「伝道者？」

「そうだ。君が“旅”で見出した“生”や“技”などをローランに再び訪れた

暁にぜひ伝えて欲しい」

「ローランの女は手先が器用で、作る武具も一流だ」

「伝道者の出現で、ローランの繁栄は永遠に続く」

「その代わり、私は他国に名が響く“名君”となろう」

「分かりました」

「では、私が最初に名を記そう」

ラードはペンと取り、“ラード・ローラン　ここに王道を築くことを誓う”と記した。

「では私も」

“ルース・リリアン　ここに“伝道者”となりローランに技巧と繁栄を呼ぶことを誓う”

「よし、ここに誓った」

「再びあう時を私はここでいつまでも待つからな」

「ありがとうございます」

「誓いの文章だけでは、心が満たされなくてな」

ラードは室内を歩き回った。

「よし、ここだ」

暖炉の傍で、ラードは止まった」

「ここに刻もう」

ラードは探検を手にとると、自分の名を刻んだ。

「君も刻みたまえ」

私はラードより短剣を受け取ると、ラードの名の隣に名を刻んだ。

「次に来る時のために、この部屋の内装を変えないことを約束しよう」

その日、私は若き王と一夜、酒を飲み、世のこと、国のことなどを語り合った。

第四章 誓い（後書き）

第四章ここに終わるb

第五章は来週あたりに送るつもりです。
それまで、お待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8103i/>

“旅人”

2010年10月21日22時41分発行